24

鄙のまれびと
hina no marebito

ギブ・アンド・ギブの人生

メディエーター　青木匡光氏（86）

二浪中に家人へ「アジアに興味がある」と言った青木匡光は父の友人からアジア問題の権威、一橋大学教授（当時）の板垣與一を紹介された。板垣にヒューマンインパクトを受けた青木は、板垣の母校・小樽商科大学を受験、桜が咲く。板垣に報告すると「小樽商大の学長へ『青木君が小樽へ行くので自分がいた第二寮への入寮方よろしく』とその場で葉書を書いてくださった」。大学では若い講師と深夜まで酒を酌み交わし、人生論や文学論を戦わせた。懸賞論文の入賞仲間に高坂正堯（元京都大学教授）や大野功統（元防衛庁長官）がいた。

青木は三菱商事へ就職、営業希望が経理だったことから10年で退社。広告代理店等を経

て、徒手空拳で船出。「ヒューマン・ハーバー」、人間の港の管理人として寄港する船（客）に水や食料を供給するメディエーター（人間接着業）を宣言。見返りを求めない「ギブ・アンド・ギブ」。夫人は「わかりました。自分のやりたいように生きてください」と応じ病院でパートを始め、一家の糊口を凌いだ。

初上梓の『顔を広め味方をつくる法』はサブタイトルが「ビジネスマンのための『人脈』のつくり方」で、人脈ブームに火をつける。印税がヒューマン・ハーバーのオフィス頭金に。寄港客等が出版記念パーティー「青木匡光を肴にする会」に150人、翌月のホテルオークラ「青木ママサ光君をサマにする会」に400人が集まり、青木は自信を深めた。

「有能と有能が出会うと1＋1の2でなく、5×5の25になる」と目論んだ。毎月のサロンでは「黙って聴いて帰るのは無礼でっせ」と参加者全員に語らせ恥ずかしがりを払拭。支援対象も双六で言えば上がりに向けサイコロを振る人間への知的パトロンを目指した。当時高3の長男に東大名誉教授の竹内均を紹介すると、ヒューマンインパクトで駿台予備校の国公立コース1500人中、360番ほどが11位に急上昇し、志望校に見事合格。

ヒューマン・ハーバーは今年3月閉港、4月のバス旅行に青木を慕う40人が集結。群馬県庁ビル33階から両毛三山パノラマ展望、赤城山南面と上田城の各千本桜を観桜。夜の謝恩会で感想を求められた夫人が「私は口下手なので今の楽しい気持ちを歌で表したい」と「セ・シ・ボン」を披露し、喝采を浴びる。青木は言う。「今後は『旬の探求』。人の旬、食の旬、四季の旬を追いかける。先日も友人と近江八幡辺りの教林坊、永源寺で紅葉、京都で食を楽しんだ。仕掛けを他人から自分へシフトし、コンマという人生の句読点を打ち続け、死ぬまで生きる」と。〈文中敬称略〉

文・写真　山ノ堀正道